

# 津八幡宮祭礼の史料と画像

幕末惣町祭礼の一事例

福原敏男

Historical Materials and Images of the Tsu Hachiman-gu Shrine Festival: Socho Festivals at the End of the Edo Period

はじめに

- ①『八幡御祭礼之次第』の検討と石水博物館本との照応
  - ②国立歴史民俗博物館本の検討
- おわりに

## 【論文要旨】

近世の政治都市である城下町を始め、さまざまな都市における祭礼において、一つの町共同体の祭礼と、町共同体連合による城下惣鎮守の祭礼が重層的に存在している事例がある。本稿では右の惣町祭礼の視点より、三重県津市の津八幡宮の祭礼を対象とする。歴博所蔵の伊勢津八幡御祭礼図巻一巻、石水博物館所蔵の伊勢津八幡神社祭礼画巻一巻を検討し、三重県立図書館所蔵の『天保十三年（一八四二）寅年八月十五日 八幡御祭礼之次第』を紹介、分析することによって、幕末の一城下町の惣町祭礼について考える。

江戸初期の城下町の構成町は寛永元年（一六二四）の「町年寄推挙文書」によると二十二か町である。『勢陽雜記』に記された十七世紀半ばの津祭礼では二十七か町が参加しており、上記の初期城下町構成町に加えて数か町が参加している。幕末の祭礼における町方行列には、文献史料では津城下二十八町が、歴博本絵巻では二十七町が参加している。近世後期における二十八か町の参加は、『勢陽雜記』に比すると、ほ

んど同じである。津の町人町の数は、江戸中期、四十数か町の町名が報告されており、江戸後期には更に増加し、明治五年（一八七二）には五十五か町となっている。以上のように、幕末の町数からすると、八幡宮祭礼には町人町内の半数強の町しか参加していない。これで惣町祭礼といえるのか、という問題がある。

しかし、先述した通り、近世後期の行列参加町は基本的にはすでに十七世紀半ばには参加しており、それはほとんど初期城下町の構成メンバーなのであった。

行列に参加していない他の町人町も同様に八幡宮祭礼の費用負担を行っており、二十八町は歴史的由緒をもって町方行列に参加したのである。

次に、出し物の特色は津の町人の謡文化、能楽の素養が反映している点を指摘した。幕末の津八幡宮祭礼の出し物は、津の富裕町人・藩上層部・家臣の嗜好を反映している謡、謡曲の世界を中心に形作られていた。最後に謡曲がいかに町人に親しまれていたかを示す一例として、当時の津町人の一家に伝来した謡本を検証した。